

幼児の生活の場としての幼稚園

——保育形態の課題として——

倉 橋 惣 三

幼稚園を考えたおすには、方法も大切であるが、その前に幼稚園という世界の生活形態を考えたおかさなければならぬ。

(一) 作られすぎた場

従來の學校はこしらえた方法の場になりすぎているともいえる。一體こんなに、きちんと方法向きにこしらえた場で本當に教育とすることができるといふだろうか。目的及び方法に都合のよい形は、その目的と方法にはいふだろうが生活としては無理を含んでゐる。無理とは子供が其處で自然の生活をしていない事である。無理な場で與えられた教育は、その場がなくなると崩れて仕舞わないとも限らない。茶室に坐つてちやんとしているが、茶室から出ると大あくびが出るというのも、それである。本當の教育の効果は、もとへかえるとか

くずれるとか、はげるとかいう事のないものでなければならぬ。そこでこまかい方法を考へる前に、場を先きに考へる必要があるのである。即ち子どもには、どんな生活形態が自然であるかを考へ、先ずそういう場を與えて、その中で効力を持つように方法を考へるのが順序である。但しその子供達が年齢が進んでいけば、多少の無理も必ずしも無理でないかもしれない。例えば小さいベンチに腰かけて何十分、何十分とじつとしているのはかなり無理な事だが、今は勉強の時間だ、こゝは學校という特別のところだ、家にいるのとは違う特別な時間であると、理解し覺悟し斷念することが出来るものには、無理が無理で通せるでもあろう。しかし幼稚園の幼児といつた年齢の子に、そういう理解・覺悟・斷念は出来なない。無理は押しつけでもしなければ通らないのである。つまりほんとうにはならないのである。第一あんなに生き生きしている幼児が、自然にそむぬ生活形態に置かれるのはさぞ苦

しかろう。その幼児を教育する幼稚園が、果して幼児達に幼児の生活の場を、先づ十分與えているかという事は、考えてみなければならぬ事である。適確にいえば、若し、そこから考えずに、幼稚園の形を従来どおりにしておいて、方法のみ新らしくしても、根本は舊態依然たることになつてしまふであらう。

そこで場の自然さとは、自然の生活のできる事である。まず幼児らを自然の生活に置いてみて、その上での方法である。つまり、「こゝは幼稚園だから……」という、あれを出るだけ避けたいということになる。従つて幼児は、教育されていくという感じのみじんも起らない自然な生活をする事が出来るのである。或る先生は子供が來て飛び歩いたりすると「ここをどこだと思つていますか」という。まさか、そうまで開き直つたことはいわないとしても、「幼いとはいゝながら少しはわきまをなさい。幼稚園に來たら幼稚園らしくやつてくれ、やつてくれなくてはこちらが困る。」という譯である。これは幼稚園は、もと／＼自然の生活の場でないということに出發しているものといつていゝ。幼稚園が、そういうことで、幼児の生活を型へ入れておくのなら、保育はやさしい。鳥よ飛ぶな、魚よ泳ぐな、といつて教育するやうなものだ。われ／＼は長い間、そういうことになれていくが、それでいゝのだからか。われ／＼は幼稚園という世界を、こういうものゝ型をつけて、そこへ子どもらをはめ込むくせがついているから、そうならない子は、はみ出しの子と思ふことに

さえなる。

(一) 生活と経験

さて、その生活の本當にいき／＼して出來るといふのは、分解すればどういふ事になるか。その自然生活とはどうした本質をもつものかについて考えなければならぬ。眞實な生活とは「活動」の出來る生活でなければならぬ。その「活動」とは、たゞ動きまわる事ではない。物理的運動でないことはいうまでもない。人間の活動は、自發性を持つていなければ眞の生活活動ではない。まりがころがつてゐるのは運動だが、人間の例えて「ゴムまりのように」といつても、自發がはいつてゐるのでなければならぬ、又その活動はどんな活動でも或る長さを持つ。長さというより過程を持つ。これは活動の通つていく道を時間的に云つたのだが、本當の生活をしてゐる場合、その過程は「経験」でなければならぬ。こういう風に考えてくると、生活とは活動と経験とが十分に許されている時にのみいえることである。おとなは講話をきいて考へているのだから一つの経験であろうが、子供では違ふ、子供がたゞじいつときいてゐる丈では、活動も経験も充分に行われてゐるといえない。子供は話をきいて目を輝かし身をのり出してゐる。その時は活動と経験が行われてゐるのである。ましてや、手を以てし、足を以てする實體のその活動に於て、経験が充實される。英語でいへば、アクティヴィティ

イとエクスペリエンスである。私が今朝から活動したというのは、今朝からどれ丈のアクティヴィティとエクスペリエンスをしたかである。たゞ機械的の事をしていたら本當の生活をしたとはいえない。私が半日寝ていたとすれば、生理的には生活していたが、人間経験をしていたとはいえない。すなわち、十分に生活させる場とは、そこで十分に活動と経験をさせ得る場でないならばならない。極端な例でいえば、牢獄の中では何等の人間活動がない。少くも新らしい経験を積む事はない。故に生活でない。動物が動物園でありの中に入れられているのは、何等の生活をしてるとはいえない。われわれの幼稚園では、與える目的を何等かの方法で傳えてはいても、本當の活動をさせ、経験をさせているかどうか。又本當の活動をさせ経験をさせるために、その場のことを考えているだろうか。

本當に活動し経験を爲すには、自由——私はむしろ自然といふたいが——が必要である。この事を他の面から考えると、活動・経験ができる爲には個が個として存在していなければならぬ。太郎が本當に活動し経験を爲すには、實に太郎が太郎である時である。小さな子では、このように生活した時、やんちやわがまゝになる。この時太郎は太郎らしく、花子は花子らしく生活しているのである。それでは勝手次第という事にもなるが、一おうは太郎は太郎として、花子は花子としてこそ活動し経験を爲す。尤も此處では個を尊重せよとか、個が大切であるとかいうことまでは云わず、兎に角く個

が個としてその自由——自然——を許されなければ、活動も経験もないことを見落さないようにしたい。

自由とか自然とは程度次第の問題でもあるが、個を中心にして幼稚園の問題を眺めてみよう。假りに庭があり、相當の部屋があり、そこへ子供がふらりときて、ぼつり／＼ときて、ある子はブランコにとつき、ある子は砂場にといいうな朝のひと時では、今云つた事が實際生活として行われている。そこでは六人か七人の子が「おはよう」といゝながら、自發的活動をし、めい／＼自分の経験をし、すなわち自分の生活をしている。若しその生活のままの姿がそのまま續いて、その間に先生の目的に叶う教育を織り込んで行く事ができたとすれば、その子の個は害されない。ところが、段々個が多く集つて来て、先生が一旦とめにして扱わなければ扱いきれないというようになるかどうか。此處に組という問題が起る。

學校という場所で、何が學校という教育の特色をなすかというところ、組を作っている事と見られている。家庭にも往來にも組はない。學校では鐘をならし甲組の子は甲組に入れる。乙組の子は乙組に入れる。それと同じように、幼稚園でもやはり組にする。そしてこの組という形態が、幼稚園の教育の特色になつてゐる。ところが組の子が組から外へ出て組という場を離れて遊んでいる時、自然の生活をする。保育室の組の中では、教育は見られるが自然は見えない。組の中

でいる。おとなしくお席にいて経験の出来なかつた子が、仲よくしたりけんかをしたりして経験している。組の中では先生に「皆さん」と呼びかけられる事によつて個から離れてきた者が、組を離れるとそこには個の自發活動が始まつて僕になり君になる。こう考えると——少し誇張かもしれないが、——組というのが幼稚園の曲者である。屢々個を失わせ、活動を失わせ、経験を失わせる曲者である。但し、こうはいうけれども幼稚園に組のあることに反對するのではない。非常に大勢のやんちやな子どもをなれない先生が取り扱う上からは、組を編製する事はやむおえない。たゞ、その「やむをえず」ということが、先生によくわかつていて貰えればよろしい。それが幼稚園教育の本来の本質だと考えられたら間違いだというだけである。集めて扱うという事は、先生の都合であつて、幼児生活が本来求めるものではない。そこで一應大勢を扱う上にやむをえないという實際は認めるとして、そこで、個と組との間をとつて、組をできるだけ自然なものにする工夫がある。組は個と對立する。個の集まつたものが組だといへば、それだけの數學のような話だが、組が組になつてゐる時、個は組の中に入れこになつてしまふ。殊に幼児は幼稚園の組という傳統的社會的通念に入れられて、よろこんでゐる。組に入れられること、そのことが、幼稚園へ來たとと思つてゐる。子どもも、親も、先生も。

(三) 組と個

少し話の進め方を變えて、組とは一體何であらうかと考へて見る。幼稚園令以來「一人の保姆に何人の子供」という。「何人の子供に一人の保姆」とはいわない。即ち保姆さんは組頭である。組の子を責任を持つてあずかる。その時一人の保姆が責任を持ち得る限度を組の人数とする。責任をしようことの一番簡單なのは、見失わないこと、けがをさせないことである。その責任對象をさえ果す事のできない人もいるが、とにかく責任の範圍である。しかし保姆さんは子供がどこかへいなくなる、けがをするといつたことの番をするのみでは勿論ない。子供の顔の色、目の色、靴下が兩方あるか、お辨當をどこへ置いたか。母とはその子が幾人あらうとも、そのような責任を責任ともしないでいつも果してゐる人であるが、保姆さんは組を、そうした、責任對象その四十人を保育對象としてゐるのである。ところで、組は責任對象としてはまとまつていなければならぬが、保育對象としては必ずしもまとまつていなければならぬ物であらうか。保育對象としては組が個に散らばらないまでも、幾つかにほどけて來るべきであらう。「皆揃つて繪をかく」というのも、組を保育對象にするからのもので、そこに一齊保育が行われるのである。その結果、或子は自由を失ひ、先生の教育的專制(?)に服して、かきたくもない繪をかくなければならなくなる。とい

つて、同じ生活をいつしよにすることが、いつも不自然という譯でなく、又、そこに教育的價値もある。そこに出来て來るのが生活分團である。分團という事を事々しくいうべきでもないが、よくわかるようにいえば組の自發、自然な分れという事である。自然というのは、子どもの先生からの仕むけでなくとも、子どもは、自發に遊んでいる時、こちらでは石蹴り、こちらでは鬼ごっこ、こちらではけんか等々、自然に分れて行われていく。即ち、子どもは朝幼稚園にちりほらりとやつて來て、スポンタニアスグループを作り、思い／＼の生活々動を始める。そのできてきたスポンタニアスグループを先生があちこちと廻つていくのである。だからこゝに先生の仕事がある。但しこのスポンタニアスグループは幼稚だけではよく出來ない點もある。「よつといで」「いれとくれ」と思い／＼に集まりもするが、中には、仲間にはいれない子供がいる。それをグループに入れていくのも先生である。これを、もう一つすゝめれば、机をば小グループが出來るようにおき、めい／＼の席を定めるのも先生の仕事である。理想は自然に出來たスポンタニアスグループであるが、しかしそれが出來るように仕むけるのも先生の仕事である。こうして出來た分團は個が組の中にいて、保育對象の中にはいる道である。皆さんの中には、組を一つにまとめてさえずつかしいのに、鬨つも分けてはなおむつかしいという人もあろう。分けると方法上には當然むつかしさがおこる。しかしそこからは熱練の話である。又いつも／＼グループでなければなら

ないというのではなくて、お話などの場合、皆集まつてもよからう。たゞ私のいゝたいのは、組は組として始終たがをはめておかなくてはならぬという保育通念を改めたいのである。幼児數の多い場合、困難は多々あるうが、教育しようという熱心があるならば、分團保育が試みらるべきである。

更に、活動者、經驗主體は個であるとしても、人間の生活は活動と經驗の次に大切なことを要求する。人間というものは本來社會的の者である。社會を好むというばかりでなく、社會的生活形態をとる時のみ人間であるといつていゝ位だ。昔の考え方は必ずしもそうではなかつたかもしれないが、今日では社會という事を大に重要視する。従來は倫理學でも一人の道徳という事を云うことが多かつたが、一人でいる時は眞に生活しているとは考えられない。すなわち、個は分團の中に居て始めて生きる。個がその中に埋没してしまうといふので組を否定したが、分團では個の生活が埋没しないで實現し發展して來るのである。例えば傍の人に親切な感じを持つ事は、修身上大切である。しかし行動しなければ生活ではない。勿論行動のみで心のないのは問題にたらないけれども、私自身が私に實證する爲にも行動しなければ生活でない。殊に小さい子の場合はその心からの人間行動の出來るのを分團の中のことであらう。